

みがあつたが、この奥書のある回鶻文佛書や、同じ俱舍論實義疏などはその中の一包みから出たものである、ロス氏が此の跋に見える年代の事についてペリオ氏と語り合つた時に、ペリオ氏の説としては、敦煌の佛洞の最も北の一群、即ち蒙古時代に屬するものを、また王道士（敦煌佛洞の書籍發見者）が搜索して、これからも僅かながら寫本を得たが、此の群中の二つの小洞だけは、王道士も手を觸れず、そのままに成つて居たのを、ペリオ氏自身で精探して、第十三世紀及び第十四世紀の日附ある寫本版本等を發見した。さうして此の中の或ものは回鶻文であつた。それで此の至正十年の跋を有してゐる回鶻の小本及び、其の他の同種の書は、王道士が此の群中の佛洞から發見したもので、それを改めて此の澤山の書物を藏する方の洞窟の中に、移し易へたものであらうといふのであつた。此の見解は道理のあることで、王道士が此の書窟（即ち多數の書物を發見した洞窟）をかく書物の貯藏の場所に用いたことは、ペリオ氏がこの洞窟内で發見した康熙時代の道教經典の小版本に徵しても證せられることである。かゝる事情を合せて考へると、此等の回鶻本は、一九〇〇年—一九〇七年（即ち洞窟發見の時から斯坦因氏がこの洞に來た時迄）の間に、丁度康熙の版本の場合に於ると同様に、新に舊藏の書物の上に加へられたものと考へられるといふのである。かくして敦煌の書窟の塗込められたのを、矢張り宋初に置かうとする考に對しては、今の所では自分も贊意を表したい。併しそ之が必ず動かすことの出來ない事實であるか否かについては、今日尙手の届いてゐない、此處から出たすべての資料を檢討した後に知り得べき事で、今はたゞ然く思はれると言ひ得るに過ぎない。自分が特にこの考をこゝに記して置くについては、別に理由の存するものがある。それは此の回鶻文實義疏の奥書の一つには、自分の知る所が過らざる以上は、從來誰も注意しなかつた、然も一見した所では人を驚かすべき日附を有するものゝ存するを知つた